戦利品としての聖遺物容器
――君主の携帯用パネル型聖遺物容器の成立をめぐって

太田 泉フロランス

はじめに

キリスト教において聖なる人物の遺体や遺品、または聖なる人物が生前に触れたものなどは、聖遺物（reliquia）と呼ばれ、古くから天と地を繋ぐものとして、崇敬の対象であった。特に西欧中世では、聖遺物は、信徒の信仰において重要な役割を果たしていたといえる。聖遺物は、それ自体が聖なる力を個別に発しているわけではなく、神から発される聖なる力（virtus）を受け、それを周囲に発散するという、聖性の仲介をするメディア（媒体）である。聖遺物の周囲には常に神聖なる空間が現出されることとなり、信徒は神の力の恩恵に与るために聖遺物を熱心に求めた。一神教であるキリスト教は、父なる神、イエス・キリスト、聖霊を三位一体とし、その神以外への崇拝は禁じられている。そのため、聖遺物は、あくまでも崇拝（adoratio）ではなく崇敬（veneratio）の対象として許容された。聖遺物への崇敬は、その聖性の源である神への崇拝の補助的手段であった。

聖遺物は 3 つの種類に大別され得る。第一群は聖なる人物の遺体である。そして第二群は接触型聖遺物と呼ばれるもので、聖人が生前に関係したものや使用していたものなどである。聖人が身に付けていた衣や靴、聖人の日用品や所持していたもの、生前物理的に接触したものなどがここに分類される。第三群は、これら第一群、第二群の聖遺物がさらに接触したものである。

神の力を伝えるメディアである聖遺物の聖性は、物理的な接触によって伝播すると考えられていた。そのためこれに接触したものもその聖性を分与され、聖遺物となることが可能であった。

聖遺物の持つ奇蹟を生じさせる力は、神からもたらされる力によるものであるため、全ての聖遺物は理念的には全て同じ力を発していたはずであるが、実際には一般に第三群よりは第二群、そしてこれらよりは第一群の聖遺物が貴重であり、より篤い崇敬を受けていた。しかしイエス・キリストは死後昇天し、聖母は神により天に上げられたとされているため、遺体は地上に存在しておらず、両者の聖遺物は彼らに接触したものとならざるを得ない。このような中で、特にイエス・キリストの聖遺物は、接触型聖遺物でありながらその人物が神であるが故に、身体聖遺物である聖人の聖遺物よりも重要視され、篤い崇敬を受けていた。

聖遺物は、日々の典礼や祈念に用いられ、死後の救済のための神への執り成しを期待されていたが、しかし同時にその奇蹟を起こす力によって、現世的すなわち実利的な効用も期待されていた。病や怪我の治癒などの奇蹟譚は枚挙に暇がないほど知られているが、辟邪や護身を期待して用いられもしていた。特に身の危険を伴う場面ではその効果は強く期待され、例えば戦争において持ち出されることも古くから確認されている。しかし戦争に携帯されたのは、護身の役割とともに戦勝を期待してでもあったようだ。本論文では、このような目的の下に使用された聖遺物とその容器について、特に中世後期の世俗の君侯が所持していたものに着目し、その特徴について考察したい。

コンスタンティヌス帝が十字架を掲げてミルヴィオ橋の戦いで勝利して以来、十字架は戦勝を証しする記号となっていったが、シンボルとしての十字架ではなく、キリストが磔刑に処された十字架そのもの、すなわち聖十字架の聖遺物は、戦場で何らかの奇蹟を確実にもたらす、神の力の宿る聖遺物としてしばしば持ち出されたようである。[1]

しかし、戦争において使用された聖遺物は、聖十字架だけではなかった。古くは542年のサラゴサ包囲戦において、フランク軍の攻撃に対し、住民

が城壁に都市の守護聖人である聖ヴィンケンティウスのチュニックを掲げた。シルデベルト王とクロタール王が率いていたフランク軍は、これを目にするとすぐに戦意を喪失し包囲をといた[2]。この出来事は、メロヴィング朝の王たちに、聖遺物が都市を守るためのみならず、相手への攻撃にも有用であるとの認識を促したようで、この事件以降王たちはしばしば遠征に聖マルタンの祭服を携行するようになったという[3]。

またシャルルマーニュは 795 年のサクソン遠征の際、同伴させたサン=ドニ修道院の院長と修道士らに、守護聖人の聖遺物を携行させている。この王の死後に成立した、騎士道的な理想に沿った逸話を集めた英雄譚であるシャルルマーニュ伝説の中でも、特に中世において騎士のあるべき理想像として好まれた『ロランの歌』では、主人公ロランの持つ剣にも聖遺物が収められている。この「デュランドゥス」と名付けられた剣は、その黄金の柄に聖ペテロ、聖バジリウス、聖ドニ、そして聖母マリアの聖遺物が収められており、ロランはこれを携えて、イベリア半島への遠征に赴いている[4]。

903 年にトゥールを襲ったノルマン人の侵略においては、トゥールの聖マルタン教会の参事会員が、彼らの守護聖人である聖マルタンに祈りを捧げ、聖人の墓からその遺体を取り出し、既に破壊されていた都市の門まで運んだ。これを見て恐れをなした敵方のノルマン人らは撤退を開始したが、都市を守っていた兵士らは力を得、逃げる敵を追いかけて 900 人もの兵士を殺害したという[5]。

このように、聖遺物は戦争においても古来より非常に重要な役割を果たしていた。デンマーク王ホリックに 845 年の遠征の報告を行った家臣が、フランク人においては、「生者よりも死者の方がやる気がある」と話しながら、軍事行動における聖遺物の有効性を示している[6]のも、まさに中世キリスト教世界の聖遺物の使用の状況を端的に示していると言える。

しかし戦勝を頼んで聖遺物を戦場に持ち込むという習慣は、中世の人々によって大変有効であると考えられていたにも拘らず、10 世紀以降徐々に減っていったようである[7]。例えば 12 世紀のリエージュにおける聖ランベールの聖遺物の扱い方の変化にもその傾向が窺える。1141 年にリエージュの軍隊

が、バル公領の騎士らに掌握されたブイヨンの広場への反撃を行った際、一旦は形勢が不利となったリエージュの兵士らの下に、司教区の守護聖人である聖ランベールの聖遺物が、増援とともに持ち込まれた。しかしこれまでの例とは異なり、この逸話では、司教が聖遺物を戦場に持ち込むことにどれほどの抵抗を示したのかが強調されている。彼は、聖ランベール（の聖遺物）が先頭に立たない限り、進軍しないと主張する友軍に押され、高位聖職者と大聖堂参事会員全員と相談した後、やむなく譲歩し、聖遺物を持ち出した。この 10 年後、リエージュ司教がナミュール軍との戦いに使用して以降、聖ランベールの聖遺物が戦場に持ち出されることは二度となかったという[8]。

聖遺物を戦場に持ち出すことに対する忌避感は、聖遺物の持つ霊的、物質的価値を高く評価し、逸失や略奪といった危険を避けようとする聖職者側の心性に基本的には基づいていたようである。そのため、代替案として聖人の墓や聖遺物に触れ、聖化された軍旗が使用されるようになった。また、聖職者自身が戦争に同行することも少なくなっていったとされている[9]。

しかしながら、15 世紀に起こった戦争での戦利品目録を博捜していくと、なおしばしば聖遺物容器が記されていることが確認される。筆者は、これらが世俗の君主の個人的な持ち物であったということに注目し、都市が主体となる戦争においては、よほどの重大事でない限り、前線に聖遺物を持ち出す習慣がなくなった後にも、個人的に聖遺物を保持できる権力を持った君侯に限っては以前の「有効な手段」に頼ることができたと考える。また、このように君主によって戦地へ携帯された聖遺物が、どのように持ち運ばれたのか、すなわちどのような聖遺物容器に収められて運ばれていたのかは、これまであまり顧慮されてはこなかった。しかし、現存作品や複数の文書の記述を比較していくと、いくつかの共通点が浮かび上がる。それは、いずれの作例も、高い地位にある君侯が身近に所有していたものであり、その形状はポータビリティの高い、コンパクトなサイズの開閉可能なパネル型の容器であるということである。また中世初期に好んで戦地で使用されたような、1 つあるいは少数の聖遺物ではなく、多種多様な聖遺物が収められたものであった。本稿では、このような聖遺物容器について考察を行いたい。

2．タンネンベルクの戦いにおける戦利品としてのパネル型聖遺物容器

そうした作例の 1 つとして、15 世紀に戦争で奪われた聖遺物容器が、ワルシャワの軍事博物館に現存している（図 1）。「中世史上、最大の会戦」[10] と言われ、ドイツ騎士団とポーランド・リトアニア連合軍が争った 1410 年のタンネンベルクの戦いでの戦利品である。ドイツ騎士団は、第 3 回十字軍の際に聖地に組織された「エルサレムの聖母マリアドイツ病院兄弟団」を前身とした騎士修道会で、拠点を西欧に移して以来、1 つの騎士修道会というよりは、1 つの国家としての性格を多分に持ち、14 世紀から 15 世紀半ばにかけては現在のポーランドのマルボルクを本拠地に活発に活動していた。[11]

タンネンベルクの戦いでは、開戦当初はドイツ騎士団が優勢であったが、次第にポーランド・リトアニア連合軍に押し返され、ついには大敗北を喫する。戦いの中で、騎士修道会総長のウルリッヒ・フォン・ユンギンゲンは戦死し、騎士たちが敗走した後に、連合軍は戦地のみならず付近のドイツ騎士団側の陣営をも襲い、多くの金品を略奪した。現在、ワルシャワのポーランド軍事博物館に所蔵されるこの聖遺物容器もその 1 つである。

ディプティック型のこの聖遺物容器は、片翼が 18 × 11cm の小さなもので、両の手のひらの上で眺めることのできる大きさである。容器に記されたドイツ語の銘文には、この容器が 1388 年にエルブロンクで当時の総長のティレ・ダギスタァ・フォン・ロリッヒの注文によって制作されたこと、そして中には聖母マリアと聖人の聖遺物が収められていることが表されている。[12] 銘文に、この容器自体のことを自己言及的にパネル（thofil）と記しているように、2 枚のパネルの内側に各々 29 点の区画が設けられて、その中にそれぞれ聖遺物が収められるようになっており、両翼が蝶番によって閉じられると 1 枚の板状になる。両翼内側の区画は、パネルの四辺の縁の部分に施され、その中心の空間には鋳造による小さな像が付されている。左側のパネルでは、ゴシック様式の鋭角的な建築モティーフの下に、聖母マリアと聖ヨハネに挟まれた磔刑のキリスト像が表され、人物像の立つ丘の部分には当初はエマイ

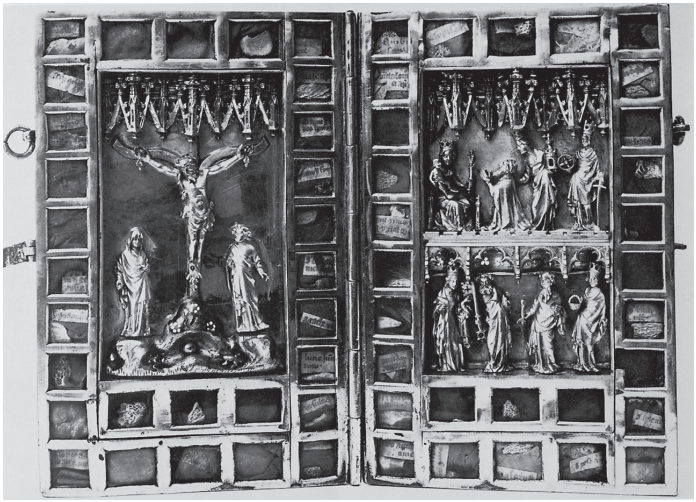

図 1 「ディプティック型聖遺物容器」、エルブロンク、1388 年、ワルシャワ、ポーランド軍事博物館、18m × 11cm

ユがかけられていたと思われる。右側のパネルは、さらに上下に 2 つに分けられており、上の区画では、左側上部と同じ建築モティーフの下、玉座の聖母子の前に跪き、聖バルバラに執り成される寄進者と、聖カタリナが表される。下の区画では、三葉形の装飾が付いた 4 つの丸みを帯びた三葉形の建築アーチの下にそれぞれ聖マルガレーテ、聖ペテロ、聖パウロそして聖ドロアテの像が付けられている。これらの像は大変小さな大きさであるにもかかわらず、繊細な顔貌表現と丸みを帯びて破綻の少ない衣紋の表現を示しており、その大きく腰を突き出したポーズは、ディプティックを開き全体を眺める際、造形を決して単調に終わらせることなく、それぞれの小像に生き生きとした動感を与えている。ヨハン・ミヒャエル・フリッツは、これらの小像は、当時形成されつつあった、柔軟様式の特徴的な様相を示しており、この作者を例えば、トルンの《美しき聖母》やその関連の作品を制作した親方の周辺に求めることができると推測している。[13]

両翼の外側は（図 2, 3）、外周に先述の銘文が刻まれ、その内側に線刻によ

図 2　同ディプティック左翼外側

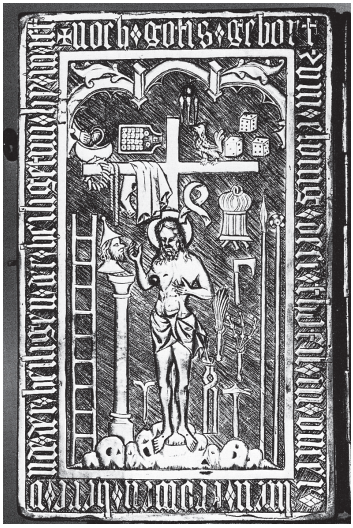

図 3　同ディプティック右翼外側

り図像が表されている。左翼パネルでは、3 つに分かれた植物の葉の装飾が大きく下方にせり出した、3 つの三葉形のアーチをもつ建築モティーフの下に、玉座に座る聖母子と、上腕にドイツ騎士修道会の十字の模様のある衣を着た跪拝者像、そしてそれを執り成す聖バルバラが刻まれている。建築モティーフからは、盾型の紋章が 5 つの輪を繋げた鎖によって下がる。王冠をかぶった聖母に支えられながらその膝の上に立つキリストは、跪拝者の方に両の腕を差し伸ばしているため、自然と跪拝する人物に対して恩寵が与えられているかのような印象を抱かせる。人物像の衣紋を立体的なものとしているハッチングによる陰影表現は、箇所によってその細かさを変え、特に玉座に座る聖母の下半身では衣の量感を大きく見せることで優美さを演出している。銘文と内部の図像を区切る枠取りの帯の上に、マリアの衣の裾、聖バルバラの左腕の部分、そして跪拝者の足の裏を意図的にはみ出して刻むことで、それぞれの人物像が手前にせり出しているかのような立体感を与えている。一方、右翼パネルの外面には、「アルマ・クリスティ」と呼ばれる図像

が線刻されている。アルマ・クリスティとは、キリストの武器の意で、キリストの受難の際に使用された道具や、彼に加えられた危害などを示した図が描かれているものを指す。中世後期には板絵や写本のページ彩色、あるいは独立した一葉の絵や象牙板を連ねたものなどに多く描かれ、個人的な祈念の用途に使用されたと考えられている。[14] また金細工作品、特に聖遺物容器にこの図像が使用された例もみられる。ここでは、手足に釘の穴があり、わき腹の傷を手で示す死後のキリストが立像で中央に表され、その周りを受難具や受難にまつわる出来事を簡潔に示した図像が整然と取り囲んでいる。

左右両翼に 29 点ずつの聖遺物を収めたこの聖遺物容器は、左翼外面に線刻された跪拝像の像主である騎士修道会総長（ティレ・ダギスタァ・フォン・ロリッヒ）の注文により制作され、以後歴代総長の所有するものであった。両の手のひらに丁度収まる本のような構造、そして中世後期において個人的祈念に使用されていたアルマ・クリスティ図像を伴っていること、内側にも小ぶりな十字架磔刑像と、聖人たちに執り成される総長の跪拝像が付され、その周囲を聖遺物が囲むという配置から、この作品は個人的な祈念の用途も持ち合わせていたと考えられる。

戦場において神の力によって自らの身を守り戦勝をもたらすタリスマンとしての機能に加え、アルマ・クリスティ図像を備えることで個人的祈念の機能も持ち合わせていたと考えられるこの聖遺物容器は、これを保持する者にとって最も重要な所有物の 1 つであったと考えられる。聖遺物容器の歴史的展開の中で、一個人が複合的機能を持つこのような容器を保持するというのは、決して一般的な事例ではなく強い権力を持つ君侯のみに限られていた。興味深いことに、本作に類した聖遺物容器の記述は 15 世紀に起こった戦争で君侯が奪われた文物についての史料の中にも数点確認することができる。

3. グランソンの戦いにおける戦利品としてのパネル型聖遺物容器

フランス王ルイ 11 世による国内統一の進行および中央集権体制の充実に

対して反旗を翻し、諸貴族と結び公益同盟を結成したブルゴーニュ公シャルル突進公（在位 1467-77 年）は、ブルゴーニュ公領を中心に周辺地域を巻き込み、ブルゴーニュをフランスから独立した国家とするべく戦いを繰り返した。結果として最後のブルゴーニュ公となるシャルル突進公は、ルイ 11 世と結んだスイス諸州の連合軍に敗れた 1476 年 3 月 2 日のグランソンの戦いで、かなりの数に上る典礼用具などの宝物を失っている。スイス軍は都市が連合したものであったため、これらの戦利品は各地に分け与えられ、まとまって残されてはいないが、同じく各地に分蔵されている関連文書から当時の戦利品分配の状況をある程度まで窺い知ることができる。

シャルル突進公からスイス軍が奪った戦利品を集め、ベルンの歴史博物館で 1967 年に行われた展覧会「ブルゴーニュの戦利品」の折にフロレンス・ドイヒラーによってまとめられた研究[15]には、スイス各州の文書館に残された関連史料が取り上げられている。本書によると、ブルゴーニュ公の軍隊においては、1 日のうち決まった時間に決まった祈りを行うという、いわゆる時禱の習慣が戦場においても保たれていた。そのため、祈りのために必要な祭具などは全て戦場に持ち込まれており、ブルゴーニュ公の礼拝堂で用いられていた多くの金細工作品が戦利品としてスイス軍の手にわたることとなった。金細工作品は一般に素材の金銭的価値の高さ故に、頻繁に溶かされて換金されることが多く、また時の経過とともに流行から外れた作品は同じく溶かされ作り変えられることが多かったため、作品が現存することが稀であると言わざるを得ない。その中においてこの戦利品を記した文書類は、失われた諸作品の詳しい記録であり、公の礼拝堂における典礼や祈念がどのようなものであったのかを知るための史料として大変重要な意味を持つ。

様々な金細工作品が言及される中でも、グランソンの戦いにおいて最も重要な戦利品と看做されたのは、《黄金のパネル（Goldene Tafel)》と呼ばれる聖遺物容器であった[16]。1476 年の戦利品目録中には以下のように記載されている。

1 つ、高価な黄金のパネル。重さ金 2 マルク 1 ロット。内部には 8 つ

> の東方（？[17]）の真珠、3つのサファイア、3つのバラスルビー。さらに、内部に貴重な聖遺物を見ることができる。とりわけ、キリスト受難の聖遺物のあらゆる欠片、それに加えて80点の聖遺物の欠片が（目につく[18]）。

スイス同盟軍は、戦利品の中の聖遺物を聖遺物容器とは切り離し、聖遺物のみのリストを作成している。その中には、一連の受難の聖遺物が含まれていた。最後の晩餐のテーブルクロスの部分、キリストを打った鞭の部分、キリストを打擲した竿の部分、荊の冠の棘、キリストの長衣の部分、聖槍の部分、聖十字架の部分、釘の部分、聖墳墓の部分が挙げられており、これらがこの聖遺物容器に収められていたと推測されている。上に引用した史料の記述から、シャルル突進公は戦地に様々なキリスト受難の聖遺物の欠片と、恐らくその他80点の聖遺物を収めた、黄金のパネル型聖遺物容器を携行していたと考えられる。

また、シャルル突進公の財産目録にもフィリップ豪胆公から受け継いだ聖遺物容器の記載があり、真珠が8点、サファイアが3点、バラスルビーが3点という宝石の数の一致等をみても両者は同一のものであった可能性が高い[19]。

> 聖十字架の聖遺物を収めた小さな黄金のパネル。片側にフィリップ公の紋章があり、中には3つのバラスルビー、3つのサファイアそして8つの真珠が飾られている。そしてもう一方には、複数の聖遺物が記されている。1マルク6オンス[20]。

実は、シャルルの先祖であり、ヴァロワ朝フランス王シャルル5世の末の弟でもあった、ブルゴーニュ公フィリップ豪胆公（在位1363-1404年）も、遺言状にグランソンの戦いで奪われた聖遺物容器と同一のものではないかと思われる聖遺物容器について書き記している。

> 私は以下のことを命ずる。神のみもとにおられる我が兄シャルル王が、私に与えたサント・シャペルの全ての聖遺物とサン＝ドニ教会の聖遺物

を収めた貴重な聖遺物容器が、私の継嗣であるブルゴーニュ公、およびその後の継承者であるブルゴーニュ公たちのもとに永劫に残るように。そして彼らにはそれから何も取り除かず、分けることもなく完全な状態でそれを保つ義務があり、それゆえ彼らがどんな理由があるにせよ、それを運び出したり、どんなやり方にせよそれを手放すことは決して許されない。もしも彼らが実際にこのことに反した場合には、私は前述した私によって設立されたシャンモルにあるカルトジオ会の修道院とその修道院院長にこの聖遺物容器を与えることを望み、かつ命ずる。[21]

東ローマ皇帝がコンスタンティノポリスの宮殿内礼拝堂に保有していた一連のキリスト受難の聖遺物は、フランス王ルイ 9 世によってフランスにもたらされ、王はその安置のためにパリの宮廷にサント・シャペルを建造した。以来、フランス王家は、キリスト教国随一の王家としてそれらの保持を誇り、大変篤く崇敬してきた。そのサント・シャペルの聖遺物および王家の墓所として由緒あるサン=ドニ聖堂の聖遺物[22]からの欠片をまとめて収めた容器は、この上なく貴重なものとされ、フィリップ豪胆公の遺言にあるように、彼以降のブルゴーニュ公らにより受け継がれてきたと考えるのが自然である。

このように、グランソンの戦いでスイス同盟軍の手に落ちた「黄金のパネル」とは、恐らく、初代ブルゴーニュ公フィリップ豪胆公が、兄王シャルル 5 世から譲り受けたサント・シャペルおよびサン・ドニ聖堂の一連の貴重な聖遺物からの欠片を収めたパネル型聖遺物容器であったものと思われる。実は、兄王シャルル 5 世も同様のパネル型聖遺物容器を自らのためにも作らせており、それが歴代フランス王に受け継がれていたらしい。しかも、恐らく「黄金のパネル」と類似したものであったと推測されるその聖遺物容器については、現存はしていないものの、ヴェネツィア共和国がフランス王シャルル 8 世（在位 1483-98 年）を打ち負かした際に、それらを入手したヴェネツィア側の史料により、その存在のみならず、おおよその形状までもが伝わっているのである。

4．フォルノーヴォの戦いにおける戦利品としてのパネル型聖遺物容器

ヴァロワ朝フランス王シャルル8世も、戦地に恐らく類似した聖遺物容器を携行していた。シャルル8世がナポリの王位継承権を主張し、ハプスブルク系ドイツ皇帝とイタリア半島をめぐって争ったイタリア戦争の最初の大きな戦いであり、フランス王国軍が教皇アレクサンデル6世の呼びかけの下に組織された神聖同盟軍に敗れた、1495年7月6日のフォルノーヴォの戦いにおいてである。シャルル8世は、この敗戦によって非常に価値の高い聖遺物をも収めた複数の行李を失ったことを8月17日付のマントヴァ公爵への手紙に記し、なんとかこれを奪回する手立てはないかと模索している。[23]

シャルル8世のもとから失われたこの聖遺物容器のたどった運命は、ヴェネツィア共和国の年代記者マリン・サヌードの記述により詳しく知ることができる。共和国が自国の歴史にとって重要と思われるものを写し、集積した公文書集、『リブリ・コメモリアリ』における記述である。これによると、敗戦の際捕虜として捕らえられた王の侍従（ヴァレ・ド・シャンブル）であるガブリエル・ランジュヴァンが、王室の金庫の鍵と共に、王が自らを守るために常に敬虔に保持していた、イエス・キリストと聖人たちの聖遺物が収められた聖遺物容器を所持していたところを、クリスタッロと渾名されていたヴェネツィア共和国の近衛騎馬兵クリストフォロス・ベルゴマスに奪われた。この兵士は、それらをヴェネツィア共和国の統領（ドージェ）、アゴスティーノ・バルバリゴおよび議会へ委ね、結局この聖遺物容器はサン・マルコ聖堂の宝物室に収められることとなった。聖遺物容器がどのようにサン・マルコ聖堂宝物室に移ったのかという記述の後には、容器の簡潔なディスクリプションが記されている。

> 王家のイコンあるいは平和牌は、純金製の小さな本の体裁をしており、内部には穿孔された6個のバラスルビーと8個の真珠が両側に施され、

王の紋章が入っている。裏側にはフランス語で銘文がある。[24]

中に収められた聖遺物については、この聖遺物容器の背面に金地に黒のエマイユの文字で記されていたフランス語による銘文から判明する。『リブリ・コメモリアリ』にはこの銘文のイタリア語訳が記載されている。

> 王シャルル 5 世が制作させたこの聖遺物容器の中には、王が自らの手で宮殿の聖なる聖遺物箱から取り出した聖遺物が入っている。我らが主の血、奇蹟の血、荊冠からの部分、聖十字架からの部分、聖槍の鉄からの部分、テーブルからの部分、縫い目のない衣からの部分、緋色のマントからの部分、最後の晩餐のテーブルクロスからの部分、笏からの部分、産着からの部分、屍衣からの部分、聖墳墓からの部分、サン=ドニ聖堂の聖なる釘からの部分、スポンジからの部分、柱に縛り付けられた際に使われた鎖からの部分、柱からの部分、鞭からの部分、モーセの石版と杖からの部分。[25]

ここからこの聖遺物容器が、シャルル 8 世の 4 代前の王、シャルル 5 世によって制作され、パリの王宮の礼拝堂であるサント・シャペルに安置されていた、フランス王国が誇る、イエス・キリストの受難の聖遺物からの欠片を収めたものであったということが判明する。

また現在ヴェネツィアの公文書館に保存されているこの文書には、この聖遺物容器の素描が付されている（図 4）。左右に翼部を持つ、パネル型の聖遺物容器で、中央のパネルの上部には蝶番で留められた開閉式と思われる黄金のカヴァーがあり、下部には菱形格子に百合の花のフランス王家の紋章と、シャルル 5 世がドーファン（王太子）として使用していたイルカの紋章が計 2 つずつ組み合わされた板が付いている。両翼は、左右それぞれ 36 個にアーチ装飾が施されて区分けされ、それぞれに聖人の聖遺物が収められていたようである。これら両翼の聖遺物がそれぞれ誰の聖遺物であるのかは、先述の銘文には記されていないが、この素描上の半数以上の区画に聖遺物の身

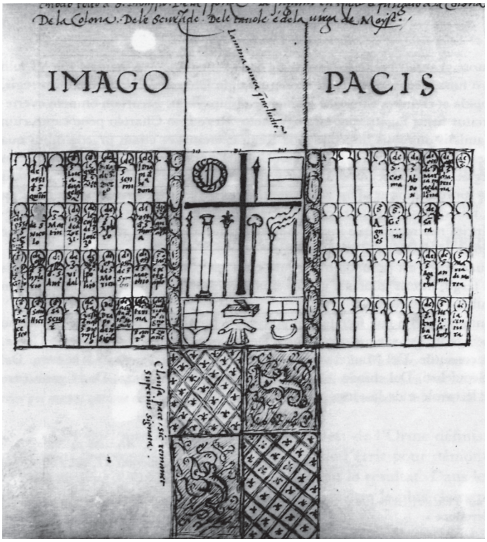

図 4 「シャルル 5 世の聖遺物容器の素描」、ヴェネツィア、1495 年、ヴェネツィア、州立文書館 Commemoriali 17, fol. 186.

元が記されていることからみて、恐らく羊皮紙などのラベルが貼られていたと推測される。両翼と中央パネルを繋いでいる部分には、バラスルビーと真珠が縦に交互に並べられている。中央パネルは、銘文にあったキリスト受難の聖遺物を収めている部分である。素描では、聖十字架が中央上部に大きく描かれ、その周囲を受難具が取り囲んでいる。恐らく金板にくり抜かれた穴の形状が示す受難具の聖遺物が、それぞれその穴の中に収められていると考えるのが妥当であり、右上部と下部の左右 2 箇所の四角形の穴以外は、その形状により聖遺物の内容を知ることができたと考えられる。この中央パネルの図像全体は、中世後期に制作されたアルマ・クリスティ図像と極めて近い構図となっており、この容器の制作の際にアルマ・クリスティ図像が着想をもたらしたと考えられる。

ところで、この聖遺物容器は、頑丈な箱に収められて大切に保管および携帯されていたことがハンス・ハーンローザーによって指摘されている。彼は、1971 年に出版されたサン・マルコ聖堂所蔵の宝物カタログ[26]で、この箱（図 5）を取り上げ、当該聖遺物容器がサン・マルコ聖堂の古い目録（il vecchio

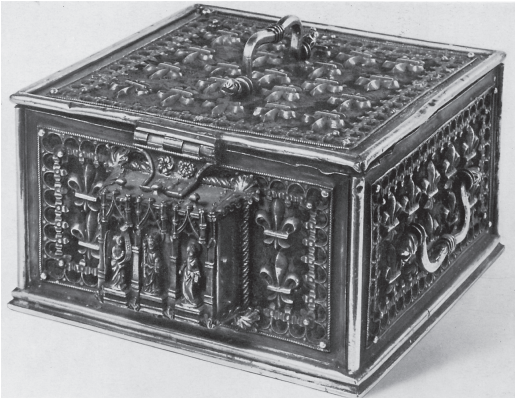

図 5 「シャルル 5 世の聖遺物容器の箱」、パリ、14 世紀後半、ヴェネツィア、サン・マルコ聖堂宝物室、14.5 × 14.5 × 8.5cm

inventario）に記されていることを指摘[27]しながら、この聖遺物容器のたどった変遷についてさらに詳しい記述を加えている。シャルル 8 世はこの聖遺物容器をビザンティン帝国由来の聖ゲオルギウスの腕型聖遺物容器[28]や皇帝聖ハインリッヒの聖十字架の聖遺物容器[29]とともに、勝利を保証するタリスマンとして、戦地に持参していたようである。そしてフォルノーヴォでの凄惨な敗北の後、パルマ付近で略奪に遭い、これらの聖遺物容器をはじめとして、持っていた携帯祭壇の調度一式、そしてさらには兜や剣までも奪われている。

この聖遺物容器は、サン・マルコ聖堂に収められて以来どのような経緯をたどったのかということも知られている。1499 年 6 月 27 日、フランスからの来賓をもてなすため、ヴェネツィア当局がサン・マルコ聖堂に対して教会所蔵の宝物を披露するようにと指示した。しかし恐らく外交的配慮から、サン・マルコ側はフォルノーヴォの戦いでの戦利品を呈示することはひかえている。この聖遺物容器は、その後もしばらくはサン・マルコ聖堂宝物室に収められていたが、恐らくヴェネツィア共和国とフランスの間で取り交わされた外交交渉の末にフランスに戻り、その後行方が不明となり現在に至っているようである[30]。サン・マルコ聖堂の 1507 年の目録には箱の記述のみが残る[31]。

以上より、シャルル 8 世がこの聖遺物容器を一辺 14.5cm の小ぶりな箱に収めて戦地に携行したということがわかる。ヴェネツィア側の文書には聖遺

物容器の大きさの記述はないが、箱の大きさから考えると大変小ぶりなものであったことが推測される。恐らく、閉じた状態では片方の手のひらに乗る位の大きさで、開いた状態でも両の手のひらの上に持つことができるものであったと考えられる。既に述べた通り、残念ながらこの聖遺物容器そのものは現存していないが、実はこれに大変類似した容器がフィレンツェの大聖堂付属博物館に残されている。

5.《リブレット》

先述した聖遺物容器のうちの2点、グランソンの戦いとフォルノーヴォの戦いで奪われた聖遺物容器は、両者ともにフランス王シャルル5世の注文によって制作され、1つは弟のブルゴーニュ公フィリップに贈り、もう一方は王自らが自身のもとに置いたものであると筆者は考えている。しかしこれら両者は作品が現存しておらず、特にシャルル突進公の奪われた聖遺物容器に関しては、素描の残るシャルル5世自身の容器とは異なり、残された文書の記述からフォルノーヴォの戦いで奪われたものと類似していることを推測するほかない。しかし、実はシャルル5世はブルゴーニュ公フィリップだけではなく、長弟のアンジュー公ルイにも同様の聖遺物容器を贈っていた。

現在、フィレンツェの大聖堂付属博物館に現存するこの聖遺物容器（図6）は、その手のひらに収まるほどの小さな大きさから、イタリア語で《リブレット》[32]と通称されている。中に収められている聖遺物は、背面にある銘文によって知られる。

> 王シャルル5世が、この聖遺物容器と、宮廷のサント・シャペルから自ら取った聖遺物を長弟アンジュー公ルイ1世に贈った。我らが主の血と奇蹟の血からの一部、荊冠からの部分、聖十字架からの部分、聖槍の鉄からの部分、最後の晩餐のテーブルからの部分〔訳註：あるいはそのテーブルクロスの断片か〕、縫い目のない衣からの部分、緋色のマントから

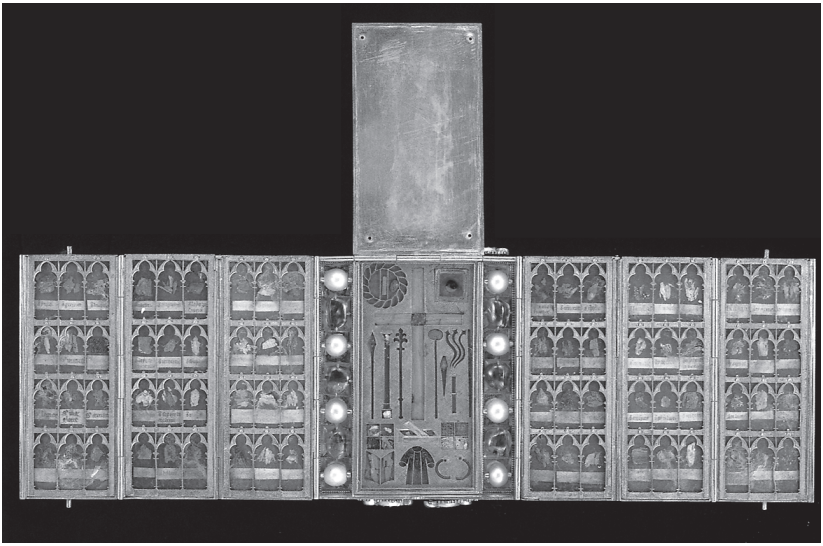

図 6 《リブレット》、パリ、14 世紀後半、24.4 × 14 × 1.5cm (開いた状態)、6 × 7.5 × 2cm (閉じた状態)、フィレンツェ、サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂博物館

の部分、キリストが最後の晩餐で着用した衣服からの部分、笏からの部分、産着からの部分、聖墳墓で見付かったスダリウムからの部分、モーセの石板からの部分、スポンジからの部分、モーセの杖からの部分、キリストを柱に繋いだ鎖からの部分、サン=ドニから取られた釘からの部分、柱からの部分、鞭からの部分。[33]

この銘文から読み取れるように、この容器は、先述のシャルル 8 世がフォルノーヴォの戦いにて奪われた聖遺物容器とほぼ同じ聖遺物を中に収め、銘文の地の文も贈与された側に関わる記述の有無を除いて概ね一致している。この事実を考慮すると、両者は同時期にシャルル 5 世の注文のもとで制作されたと推測される。この聖遺物容器がどのような経緯でイタリアに渡ったのか、明白なことはわかっていない。しかし、アンジュー公ルイは、ナポリ王の王位継承権を主張してイタリア遠征に赴き、その途上バーリ近郊のビ

シェーリエで1384年に亡くなっている。そのため、この《リブレット》も恐らくイタリアでの戦争の中で敵側の手に渡ったのではないかと考えられる。

さて、14世紀後半にパリで制作された本作《リブレット》は、やはりサント・シャペルの一連の受難の聖遺物とサン=ドニ修道院の聖なる釘の聖遺物、計19点を分け与えるために制作されたものであった。両側に3つの翼面の付いた、ポリプティック型のこの聖遺物容器は、やはり板型あるいはパネル型と形容できるもので、この点においても本論中の3点の聖遺物容器と共通する特徴をもっている。中央のパネルには、中に収めたキリストの受難の聖遺物が何であるのかを示すように、荊の冠の聖遺物であれば、荊の冠の形に、鞭の聖遺物であれば鞭の形にと、それぞれの聖遺物に合致する形状に、金板に穴が穿たれ、その穿孔部分を覆うクリスタル越しに、中の聖遺物を視認することができる。この中央パネルの上部には蝶番で取り付けられた金板の蓋があり、その金板の両面には、獣皮紙に描かれた、マリアと福音書記者ヨハネを伴う磔刑像と三位一体像およびそれを跪拝する男性像と女性像が貼り付けられている。中央パネルの両側面は、8つの真珠と、6つのバラスルビーで飾られている。両翼には、それぞれ36点ずつ、計72点の聖人の聖遺物が三葉形のアーチで分けられた区分の中に1つずつ収められ、獣皮紙によるラベルが付けられている。

本作および上述したフランス王族ゆかりの聖遺物容器に収められているサント・シャペルの一連の受難の聖遺物は、かつては、ビザンティン帝国の首都であるコンスタンティノポリスの宮廷付設礼拝堂であるファロス礼拝堂に置かれ、ビザンティン皇帝の権威を支える役目を担っていた。[34] これらの聖遺物の保持により、皇帝は、いとも気高きキリストの聖遺物の守護者となり、全キリスト教国の君侯らの中で神の力のもとにおいて優位となり、また当該聖遺物を贈与することにより、聖遺物の分配者として外交的優位に立つことが可能となっていた。[35]

このようにこれらの聖遺物は歴代のビザンティン皇帝により手厚く守られてきたが、第4回十字軍の際、1204年にコンスタンティノポリスが侵略、征服されると、宮廷や教会のその他の宝物とともにビザンティン皇帝の手か

ら奪われて、コンスタンティノポリスに新しく建国された西欧人の国家であるラテン帝国の皇帝の手に渡ることとなった。この聖遺物の保持者の移行は、政治的、宗教的に大変象徴的な意味を持った。すなわち、これまで長きにわたって、キリストの聖遺物の保護・分配者として西欧諸国の君侯の上に君臨していたビザンティン皇帝の役割を、今後はラテン帝国皇帝が引き継ぐことにより、その権力の推移が明らかに広く示されたということである。

このように信仰の面だけではなく、権力の誇示という、政治面、外交面でも極めて重要な役割を実際的にも象徴的にも果たしていたこれらの聖遺物は、しかしながらラテン帝国の皇帝のもとに長く留まっていたわけではない。苦しい財政状況に喘ぐラテン帝国最後の皇帝ボードワン 2 世は、これらの聖遺物を抵当に、ヴェネツィア共和国から多額の借入を行った。しかし依然として財政難に苦しむボードワンは、従兄弟のカペー朝フランス王ルイ 9 世（在位 1226-70 年）に相談し、一連の聖遺物をフランス国王へ譲渡する代わりにヴェネツィア共和国への借財を補填して貰うこととなった。こうして後に列聖され聖王と呼ばれることとなるルイ 9 世は、1239 年にキリストが受難の際に被らされた荊冠の聖遺物を得、さらに続く数年で総計 22 点の受難の聖遺物を入手し、フランスにトランスラティオ（奉遷）したのである。

このトランスラティオは、広くキリスト教世界に喧伝され、フランスにこれらの聖遺物が移ったことは瞬く間に人口に膾炙したようである。前王朝との血縁的連続性を持たないカペー朝は、その王権の正当性の主張のためにも、この聖遺物への崇敬を強調した。聖王ルイも、いとも高貴なる聖遺物そのものだけではなく、ビザンティン皇帝の聖遺物の守護者、分配者としての立場も引き継いだことを喧伝している。パリの王宮とサント・シャペルの建築構造も、ビザンティン皇帝のブコレオン宮殿とファロス礼拝堂、そしてシャルルマーニュが建設させたエクス・ラ・シャペル（アーヘン）の宮殿とその礼拝堂の複合構造を踏襲したもので、また、「サント・シャペル」の名も、ビザンティン帝国に倣ったものであった[36]。そして、カペー朝との血縁的連続性をもたないヴァロワ朝もまた、その王権の正当性の誇示のためにも、積極的にこれらの聖遺物を重要視し、これらへの崇敬をことさらに強調した。

このように、フランス王家にとって聖・俗の両界において極めて重要で、重層的な意味をもった聖遺物をまとめて収めた聖遺物容器を、フランス王がその兄弟に贈るということは、彼らにとって大変大きな出来事であったと考えられる。これらの聖遺物の保持には、フランス王家に連なるものとしての権力の証の役割も果たしていたのではないか。

6. おわりに

ここまで、中世後期のヨーロッパで起きた戦争において奪われた戦利品と考えられる作例4点を取り上げてきた。これらは全て、折り畳みが可能な小型のパネル型の聖遺物容器である。中世後期以降、君侯など権力者による聖遺物コレクションは、その権力の誇示という目的も手伝って、聖遺物の種類と数が増加していく傾向にあった。それにつれて、相応しい聖遺物容器が作られるようになった。なるべく多くの聖遺物を持ち運びたいとする君侯、特に戦地により多くの聖遺物を携えて行きたいとする者たちには、容器を開けた際に全ての聖遺物が一度に視界に収まるように収納できるパネル型の容器は大変便利であったことが推測される。さらに多数の聖遺物を収めていても、折り畳むことにより、それらを安全に容器の内側に保管することが可能であった。そしてなによりも、小型化することによって身近に持ち運ぶことができた。

ところで、古くからビザンティン帝国では、スタウロテクと呼ばれる聖十字架を収めた聖遺物容器が制作されていた。既にハンス・ベルティンクなどによって指摘されている通り、スタウロテクは贈与や十字軍などの略奪等で西欧諸国に流入し、そのうちのパネル型のものが、西側でのパネル型聖遺物容器に影響を与えていた[37]。しかし、当初スタウロテクの影響下で制作されたパネル型容器は、例えば「トリーアの聖十字架の聖遺物容器」（図7）に見るように、大きな寸法のものが多く、持ち運びには向かないものばかりである。筆者は14世紀後半の宮廷文化において、こうしたパネル型聖遺物容器の小型化が進んだ理由の1つに、多数の聖遺物のための容器でありながら、それ

にポータビリティを与えるという君侯からの要望があったのではないかと考えている。常に自分の身近に聖遺物容器を置くことで、彼らはそれらの聖遺物がもたらす神の力と常時共にあることが可能となる。特に戦地などの危険な場所においては自らの生命と安全を守り、さらには功績や戦勝が保証されることを期待してこれを身近に置きたいと考えるのは自然なことである。また、日常生活のみならず戦地においても、自らが平素から篤く崇敬している聖遺物を前に、神への祈念を行いたいという要請は、そこが危険な場所であるという点からみても当然生じることと推測される。こうした要望や目的のためには、大きな寸法と重量のある従来通りの聖遺物容器では適わず、聖遺物を身近にかつ安全に保持できる新しい形状の容器が求められたのではないか。本論で挙げた聖遺物容器は全て、折り畳み式であることで、中に収められた聖遺物を安全に保管でき、さらに軽い重量であることで、簡単に持ち運びができる上、自らの手のひらの中でいつでも祈念を行うことを可能にするような作例である。

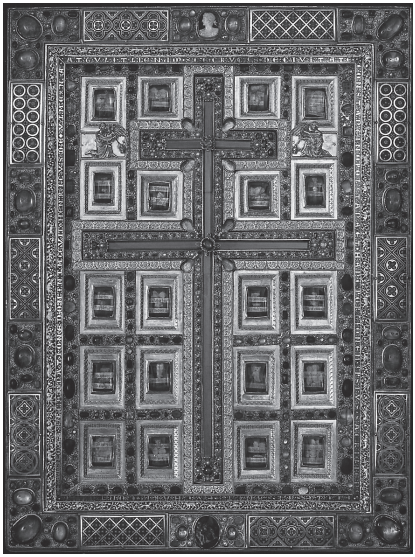

図 7 「トーリアの聖十字架の聖遺物容器」、1212-1220 年頃、金、エマイユ、貴石、73 × 55cm、トリーア、聖マティアス教会

こうしたコンパクトな開閉式パネル型聖遺物容器がどのように生み出されたのかについては、具体的な史料が乏しく、残存作例との比較検討から推測するほかはない。ドイツ騎士団のディプティックについては、ダグマール・プライジンクが、14 世紀前半にシエナを中心とするトスカーナ地方で普及した聖遺物の収納用格子が多数周縁にめぐらされたタイプの祭壇画（祭壇衝立）の、アルプス以北におけるヴァリエーションとして捉え、とりわけドイ

ツ語圏においては、聖遺物収納用格子と彫像が組み合わされる傾向が存在したと論じている[38]。しかし、安全な保管や携行に適した開閉のメカニズムに加えて、造形イメージに対する聖遺物の相対的な比重の高さや、より個人的脈絡での使用を前提としたと思われるコンパクトな寸法という、本論で扱った4点の聖遺物容器における特徴に鑑みると、その源流は、やはり開閉機能を有していたパネル型聖遺物容器に求められるものと思われる。

重要なのは、十字軍を契機に、西欧にもたらされたビザンティン由来のパネル型聖遺物容器の多くが、その寸法からみて、専ら公的な礼拝に資するものであったのに対し、本論での対象となる聖遺物容器は、各段に小さなものであるという点である。特定少数の権力者のみに可能であった多数の聖遺物の実質的な「私有」に相応しい形態は、安全な携帯に適したコンパクト性、すなわち寸法の小ささであり、また容易に聖遺物が損なわれることのない堅牢性であり、加えて君侯らしい顕示的消費を示す壮麗かつ高価な装飾であったと思われる。こうした要請に応える上で最も相応しかったものとしては、「黄金よりも尊く、宝石よりも価値が高い」としばしば形容された聖遺物が多数収められ、また礼拝等において用いられた開閉式パネル型聖遺物容器であったに違いない。

現存作例からみる限り、14世紀後半のアルプス以北における宮廷およびそれに類した環境において、聖遺物を常に身近にかつ安全に持ち運び、居城以外の滞在先でも個人的祈念を行いたいといった君侯の要望を満たすために、ポータビリティを備えていないことが問題点であった従来の開閉式パネル型聖遺物容器の「ダウンサイジング」が行われたのではないかと、筆者は推測している。

また、本論で扱った聖遺物容器の内、グランソンの戦いで略奪されたシャルル突進公の聖遺物容器を除く全ての容器には、「アルマ・クリスティ図像」と呼べる図像が施されている。さらに、同じシャルル5世が制作させ、兄弟に贈っている2作品との類似から考えると、シャルル突進公のそれにも恐らく同様の図像が施されていたと思われる。

アルマ・クリスティ図像に関して、作例と文献史料を博捜し、極めて詳細

な研究を行ったルドルフ・ベルリナーによると[39]、この図像は、元来神の小羊の図像や最後の審判図像と組み合わされ、キリストの死に対する勝利を象徴する傾向をもっていた。しかし、時代が下るにつれて、キリストに与えられた死の苦しみや受難の痛みを想起させるための図像へと性格を転じていった[40]。個人的な祈念の中で、様々にキリストの受難を想起するための補助として用いられたこれらのアルマ・クリスティ図像では、祈念を行う方法や、想起する受難の場面が常に同じになってしまわぬよう、受難の物語を示すナラティヴな性格は多分に排されていった。キリストの受難を想起する際、その時々で異なる出来事、異なる場面、異なるキリストの苦しみを思い浮かべることで、常に新鮮な心持ちで祈念が行えるようにこれらの図像は構成されていたのである。それぞれの受難具が有機的に結びつき物語を形成してしまうことを避けた、記号的性格[41]を有したこれらの図像は、裕福な世俗信徒の間に時禱書や祈禱書が広がり、個人的祈念が最早聖職者たちだけのものではなくなった 13 世紀以降は特に好んで使用された。

本論文で取り扱った聖遺物容器に施されたアルマ・クリスティ図像は、これら個人的祈念に用いられた同図像と大変近似したものであり、これらの聖遺物容器には個人的祈念の機能が付されていたと考えられる。その中でも、シャルル 5 世により制作させられた 3 点の作例は、アルマ・クリスティ図像とその各々の図像が指す受難の聖遺物が、同時に存在しているという点で非常に特徴的であり、限られた者にしか所持が許されない特権的な作品であるといえる[42]。受難の聖遺物を保持していない場合では、アルマ・クリスティ図像がいわば聖遺物の代わりとなり、祈念のよすがとして使用されていたが、これらの容器では図像が指し示す内容、つまり「本体」である聖遺物が同時に存在する。ここでのアルマ・クリスティ図像は、一見したところでは何の聖遺物であるかがわからない欠片を図像自体の中に収めることにより、身元の特定にも資することとなった。一般に多くの聖遺物を収めたパネル型聖遺物容器は、獣皮紙によるエチケットや、容器自体に施された銘文を添えられることなくしては、中の聖遺物の同定ができないが、この 3 例においては図像の力を借りることで、銘文の必要がなくなっているのである。実は、アル

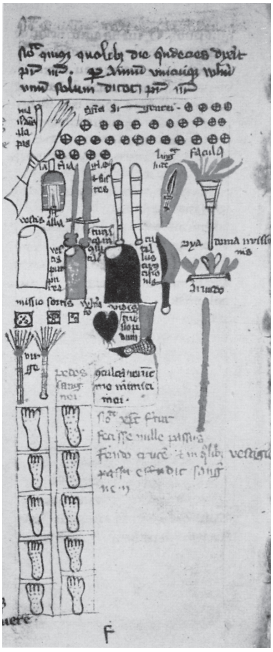

図 8, 9　シトー会ヴィラース修道院由来の合本より二葉のアルマ・クリスティ図像、ブラバント地方、1320 年頃、ブリュッセル、王立図書館、MS 4495-70, fol. 150v, fol. 152v.

マ・クリスティ図像自体にもタリスマンとしての性格があると考えられていたことが、1230 年頃に制作されたブラバント地方のシトー会ヴィラース修道院由来の写本中の 2 点の紙葉（図 **8, 9**）の銘文からわかる。[43] 確かにアルマ・クリスティ図像自体にも戦場に携行する意味があったであろう。しかしながら、神の力を備えた「本物」である聖遺物を収めた聖遺物容器はアルマ・クリスティ図像の比ではない力を持っていた。その聖遺物容器に表されることにより、アルマ・クリスティ図像の持つ意味は変化し、中に収められた聖遺物は奇蹟を起こす力の源であると同時に、図像の形に依りながらまさに同時代の自禱書や祈禱書に描かれたそれのように祈念の対象となり得もしたのだと思われる。

君侯によって戦地に携えられたこれらの聖遺物容器は、従来の開閉式パネル型聖遺物容器を「ダウンサイジング」することにより、堅牢な本体の中で

安全に聖遺物を持ち運ぶために適した形態となり、ポータビリティを獲得した。これらの聖遺物容器は聖遺物に宿る神の力によって、奇蹟を起こし、死を回避し身を守るタリスマンとして君主の頼みとなると同時に、容器に表されたアルマ・クリスティ図像によって、個人的な祈念も機能として持ち合わせていた。このような複数の機能を兼ね備えた聖遺物容器を所有し、戦地に携帯して行くことは、次のような利益を求めた行為であると考えられる。これほどの聖遺物を「私有」することができると示すことで、持ち主自らの特権的な地位を知らしめ、力を顕示することを可能にすると同時に、死や怪我を避けて、戦勝を保証することもでき、さらには戦地でもこれを使用した個人的祈念が行える。

しかし、そうであるが故に結果として戦争で奪われやすく、本論で扱った聖遺物容器のように元来の場を離れてしまうことも多い。これらの容器が特権や権力を顕示するという性格を有していたがために、それを奪われることで所有者の完全なる敗北が示され、略奪側の勝利を明確に示すものとなったという可能性については、今後稿を改めて論じたい。

■註

1 Nicole Herrmann-Mascard, *Les Reliques des Saints. Formation coutumière d'un droit*, Paris, 1975, p. 220.

2 Herrmann-Mascard, *op. cit.*, p. 217.

3 742 年に行われたゲルマニア教会会議で、宰相カルロマンの法令により、公的に承認されている。Herrmann-Mascard, *op. cit.*, p. 218.

4 有永弘人『ロランの歌』岩波出版、1965 年。

5 Herrmann-Mascard, *op. cit.*, p. 218.

6 Herrmann-Mascard, *op. cit.*, p. 219.

7 *Ibid.*

8 *Ibid*.

9 Herrmann-Mascard, *op. cit.*, pp. 219-220.

10 Stephen Turnbull, *Tannenberg 1410, Disaster for the Teutonic Knights*, Oxford, 2003, p. 7.

11 阿部謹也『ドイツ中世後期の世界、ドイツ騎士修道会史の研究』未来社、1978、

pp. 35-46（第二章「ドイツ騎士修道会の成立」）。

12 Johann Michael Fritz, *Goldschmiedekunst der Gotik in Mitteleuropa*, München, 1982, p. 343, no. 61.

13 Fritz, *op. cit.*, p. 229.

14 Rudolf Berliner, « Arma Christi », In: *Münchner Jahrbuch der bildenden Kunst*, Dritte folge Bd. VI, 1955, pp. 35-152.

15 Florens Deuchler, *Die Burgunderbeute, Inventar der Beutestücke aus den Schlachten von Grandson, Murten und Nancy 1476/1477*, Bern, 1963.

16 Deuchler, *op. cit.*, p. 148.

17 Bernhard Studer, Der Sog. Feldaltar des Herzogs Karl des Kühnen von Burgund, In: *Berner Taschenbuch*, 37 (1888), pp. 1-302, p.52.

18 Deuchler, *op. cit.*, p. 149, no. 42.

19 フィリップ豪胆公の遺言の記述、シャルル突進公の目録の記述、そしてグランソンの戦いでの戦利品中の《黄金のパネル》の一致については、以下に詳しい。Éva Kovács, *L'âge d'or de l'orfèvrerie parisienne au temps des princes de Valois*, Dijon, 2004, pp. 174-177.

20 Léon de Laborde, *Les Ducs de Bourgogne: études sur les lettres, les arts et l'industrie pendant le XVe siècle, et plus particulièrement dans les Pays-Bas et le duché de Bourgogne*, tome II, Paris, 1849-1852, p. 13, no. 2113. シャルル突進公の財産目録での記述。" Ung petit tableau d'or, garni de la relicque de la vraye croix, armoyé d'un costé des armes de monsgr le duc Phelippe, et a dedens III balais, III saphirs et VIII perles; et de l'autre costé a grant escripture de plusieurs reliques, pesant: I m. VI o."

21 Je ordenne que un precieux tableau que me donna Monsieur mon frere le Roy Charles, dont Dieu ayt l'ame, ouquel a de toutes les Reliques de la Sainte Chapelle du Palais, & des Reliques de l'Eglise de Monsieur Saint Denys, demeure perpetuellement à mon heriter, qui sera Duc de Bourgoigne, & à mes autres successeurs qui seront Ducs de Bourgoigne, & qu'ils soient tenus de le garder tout entier, sans en rien oster ne diviser, & qu'ils ne le puissent transporter, aliener en quelconque maniere, ne pour quelque cause que ce soit ; & ou cas que de fait ils feroient le contraire, je vueil & ordenne que ledit tableau, tel qu'il est, soit acquis auxdits Prieur & Couvent des Chartreux par moy fondez à Champmol, comme dit est.

22 サン=ドニ聖堂には、同じくイエス・キリストの受難の聖遺物である、聖なる釘の聖遺物が、ルイ９世による一連の受難の聖遺物のトランスラティオ（奉遷）以前より

安置されていた。

23 Bertrand Jestaz, « Le reliquaire de Charles V perdu par Charles VIII à Fornoue », In: *Bulletin Monumental*, t. 147-I, 1989, pp.7-10, p. 7.

24 *Ibid.*

25 Jestaz, *op. cit.*, appendice. In questo reliquiario qual el Re Charlo quinto del suo nome fece far sonno de le reliquie tolte per esso de soa mano nela sancta chassa del palazo. Del sangue de Nostro Sigor. Del sangue miracoloso. De la Corona de spone. De la vera Croce. Del ferro de la Lanza. De la Taola. De la Tunica Inconsutile. Del Mantel vermeio. Del Drapo el qual si cense a la cena. Del sceptro. De Drapi de l'infantia. Del Sudario. Del Sepulchro. Del chiodo tolto a S. Dionysio. De la sponza. De i ligami cum i qual el fu ligato a la colona. De le Scurzade. De la tavole e de la virga de Moyse. (Venezia, Archivio Stato, Colleloriali 17, fol. 186')

26 Hans R. Hahnloser, *Il tesoro di San Marco - Il Tesoro e il Museo*, Firenze, 1971, cat. 170 Cassettina del reliquario del libretto di Carlo Ⅴ di Francia. および Tav. CLXV, Tav. CLXIV を参照。

27 *Ibid.*

28 Hahnloser, *op. cit.*, cat. 159.

29 Hahnloser, *op. cit.*, cat. 140.

30 Hahnloser, *op. cit.*, p. 170.

31 1507 年の目録の記述は « una cassela de bosso in la qual è una casseleta del q. Re Carlo de Franza » , Hahnloser, *op. cit.* p. 173.

32 《リブレット》に関する情報と、主だった参考文献に関しては、以下に詳しい。Clarice Innocenti (ed.), *Ori,Argenti, Gemme Restauri dell'opificio delle pitre dure*, Firenze, 2007, pp. 116-123.

33 LE ROY CHARLES LE QUINT A DONNE / CE RELIQUIAIRE E(T) LES RELIQUES / P(RI)SES P(AR) LUI EN LA S(AIN)TE CHAPELLE / DU PALAIS A LOYS SON AISNE / FRE(RE) P(RE)MIER DUC D(')ANIOU DU SANC N(OST)RE S(EIGNEUR) E(T) DU SANC DU MIRACLE / DE LA COURONNE D(')ESPINES / DE LA VRAIE CROIS DU FER / DE LA LANCE DU TABLEL DE / LA COTE IN CONSUBTILLE DU / MANTEL VERMEIL DU DRAP / E IL CEINT A LA SENE DU CEP / TRE DES DRAPEAUX D(') ENFANCE / DU SUAIRE DU SEPULCRE E / DES TABLES MOYSE DE L(' E)SPONGE

DE LA VERGE MOYSE / DES LIENS A QUOI IL FU / LIEZ A L(')ESTACHE DU CLOU / P(RI)S A S(AINT) DENYS DE LA CAL / OME DES ESCOURGEES

34 Paul Magdalino, « L'église du Phare et les reliques de la Passion à Constantinople (VIIe/VIIIe-XIIIe siècles) », In: *Byzance et les reliques du Christ*, (eds.) J. Durand/B. Flusin, 2004, pp. 15-30.

35 Michele Bacci, « Relics of the Pharos Chapel: a view from the latin west », In: *Eastern Christian Relics*, (ed.) A. Lidov, Moskva, 2003, pp. 234-246.

36 Bacci, *op. cit.*, p. 238.

37 Hans Belting, « Western Art after 1204. The Importation of Relics and Icons », In: *The Image and Its Public in the Middle Ages*, N. Y., 1990, pp. 206-221, pp. 206-213.

38 Dagmar Preising, « Bild und Reliquie-Gestalt und Funktion gotischer Reliquientafeln und -altärchen », In: *Aachener Kunstblätter,* Bd. 61, 1995-1997, pp. 13-84, pp. 16-43.

39 Berliner, *op. cit.*

40 Berliner, *op. cit.*, pp. 101-112.

41 Robert Suckale, « Arma Christi, Überlegungen zur Zeichenhaftigkeit Mittelalterlicher Andachtsbilder », In: *Städel-Jahrbuch*, Bd. 6, 1977, pp. 177-208, pp. 187-192.

42 拙稿「フランス王家ゆかりの携帯用ポリプティック型聖遺物容器《リブレット》についての一考察」、『美術史』、2015 年、pp. 33-48.

43 Flora Lewis, « Rewarding Devotion: Indulgences and the Promotion of Images », In: *The Church and the Arts*, (ed.) Diana Wood, Oxford, 1992, pp. 179-194, p. 181.

■図版典拠

図 1・2・3　Fritz, *op. cit.*, fig. 297, 298, 299.

図 4　Jestaz, *op.cit.*, fig. 2.

図 5　Hahnloser, *op. cit.*, fig. 165.

図 6　Innocenti (ed.), *op.cit.*, fig. 10-1.

図 7　Eduard Sebald, *St. Eucharius - St.Matthias in Trier*, Berlin, 2008, p. 34.

図 8・9　Berliner, *op. cit.*, fig. 3, 4.

（おおた・いずみふろらんす　東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）

Les reliquaires comme butin – autour de la création des reliquaires portables de type panneau à la possession des monarques

Izumi Florence Ota

Dans l'Occident du moyen âge, on considérait que les reliques qui étaient les os ou les restes des saints avaient de la puissance pratique: il s'agissait des miracles variés, comme la cure des malades ou des blessés, éviter le mal, protéger contre les calamités etc. En principe, les reliques sont conservées dans les églises ou les chapelles et elles sont destinées à produire la sainteté de l'espace, mais les gens du peuple espèrent des bénéfices terrestres mentionnés juste avant. Par contre, depuis le règne de Constantin Ier le Grand, les puissants sortaient des reliques aux champs de bataille pour éviter la mort ou la blessure et assurer la victoire. On portait des reliques d'une manière variée et cela à évolué au cours de l'histoire mais je vais parler de la particularité commune dans les reliquaires pillés pendant des batailles au 15e siècle.

Par exemple, pendant la bataille de Tannenberg en 1410, l'Ordre Teutonique contre l'armée polonaise, le reliquaire porté par le chef de l'Ordre Teutonique a été arraché par l'armée polonaise comme butin. Ce reliquaire qui est conservé actuellement dans le Musée de l'Armée polonaise de Varsovie a été fait vers 1380, de style diptyque pliant, à la dimension 18x10cms. Dans la bataille de Granson en 1476 où Charles le Téméraire, de Bourgogne, a subi une défaite complète face à l'armée suisse, le côté suisse a gagné des orfèvreries de haute qualité du Duché. Parmi ces orfèvreries, on reconnaît le reliquaire à la forme d'un panneau doré qui

contient diverses sortes de reliques. Ce reliquaire est à mon avis supposé identique à celui que le roi Charles V a fait fabriquer et donné à son frère Philippe le Hardi à la seconde moitié du 14e siècle pour y mettre des fragments des reliques de la Passion que Louis IX avait obtenus de l'Empire Byzantin en 1239 et enchâssés à la Sainte Chapelle.

En 1495, Charles VIII a amené le reliquaire plein de reliques variées à la bataille de Fornoue et ce reliquaire a été arraché au moment de la défaite par la République de Venise. Malheureusement cette œuvre n'existe plus, mais il reste son dessin dans le document de butin, à Archivio di Stato di Venezia. On voit que ce reliquaire avait au milieu, les reliques de la Passion et le style polyptyque ayant 3 ailes sur ses deux côtés. Ce reliquaire dont on ne connaît que son dessin ressemble extrêmement au petit reliquaire dit *Libretto* qui est maintenant conservé au Museo dell'Opera del Duomo de Florence dont Charles V avait fait cadeau à son frère, Louis Ier d'Anjou, en y mettant des fragments de reliques de la Passion de la Sainte Chapelle. L'histoire du *Libretto* est inconnue depuis la possession de Louis Ier jusqu'à sa réapparition dans l'inventaire des Médicis, mais en tenant compte de ces trois exemples ci-dessus, on pourrait bien supposer que ce *Libretto* a aussi été aussi porté par Louis Ier à l'expédition en Naples et a été arraché comme butin au moment de sa mort à Bisceglie près de Bari. Il conviendrait de considérer que ce reliquaire a été ainsi introduit en Italie.

Les reliquaires supposés d'être portés par les puissants aux champs de bataille, au bas moyen âge, semblaient un petit récipient au style panneau, pliant. Au bas moyen âge, le nombre et la variété des reliques possédées par les monarques augmentent rapidement dans le but de montrer leur pouvoir. En conséquence, le nombre de reliques que les monarques sortent aux champs de bataille avait tendance à augmenter et il leur fallait des reliquaires convenables pour les porter. Le reliquaire de style panneau d'une petite dimension était très pratique : il pouvait contenir beaucoup de reliques ensemble, les garder en sécurité grâce au panneau pliant et dû au petit format, on pouvait toujours le porter auprès de

soi. Enfin, on pourrait dire que le reliquaire de ce style était convenable pour les buts de monarques qui voulaient le porter tout le temps avec eux. A l'origine, la tendance dominante dans les reliquaires anciens de style panneau était d'une grande dimension. Pourtant dans la seconde moitié du 14e siècle, ce type de reliquaire devenait de plus en plus petit spécialement à la cour. On pourrait bien noter comme une des plus grandes raisons de ce changement de dimension, le facteur dépendant du fonctionnement mentionné ci-dessus.